

黄金の樹

黒井千次

新潮社

黄金
樹の 黒井千次

新潮社



黄金おうごんの樹き

一九八九年五月一〇日 印刷

一九八九年五月一日 発行

著者 黒井千次くろい せんじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
業務部〇三二六六五一一・編集部〇三二六六五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Senji Kurai 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、この面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327206-6 C0093

価格はカバーに表示してあります。

黄金の樹

装画・梅沢和雄

本館の裏手にある生活協同組合の売店でピースを一個買った明史^{あかし}は、その角の固い青い箱を素早くズボンのポケットに挿じこむと、逃げるような足取りで正門に向った。

売店には、中の小さく仕切られた木の容器にゴールデンバットや新生や光などがバラ売りのクレヨンに似た恰好で剥き出しに並べられ、一本でも二本でも自由に買えるのだが、そして金の乏しい寮生の真似をして、幾本かの煙草を木枠からそと摘み出しては求めることに明史は奇妙な満足を感じていたのだが、毎週水曜日には、あたりを憚る後ろめたさを覚えながらも、高価なピースを一箱買わずにはいられなかった。

開襟シャツのポケットに入れたバラ売りの煙草が汗で湿ったり、折れ曲って吸えなくなるのを恐れたからではなく、週のその日だけは、銀紙に包まれ十本入りの箱にきっちり収められた煙草を持っていたかった。

正門脇の掲示板の前には、予想通り学生自治会執行部の見慣れた顔ぶれが数人立ち並び、午後

の講義が終つて帰ろうとする通学生達に、警察予備隊の保安隊への改組反対、再軍備反対を訴える街頭デモに参加するよう呼びかけている。夏休みが終つて日が浅いためか、メーデー事件の逮捕者が学内から多数出たことの余韻がまだ残っているのか、前期の試験が近づいて来るからか、執行部の呼びかけに対する反応は鈍く、容易に動員はきかない様子だった。

午後の光を浴びて立つ学生の中に牛尾のがっしりした顔貌を認めると、二人、三人と連れ立ち井之頭線の駅へ向う一年生の陰に隠れるようにして明史は正門を出ようとした。

「倉沢、お前、行かんのか。」

牛尾の太い声に名を呼ばれ、明史は仕方なく足を停めた。プラカードの柄の先を地面に突いた彼は、赤と黒の乱暴な字の踊っている板の部分を苛立たしげにひらひらと揺すりながら明史を見た。

「今日はアルバイトなんだ、俺。」

自分の言葉の言訳けがましく響くのが我ながら疎ましかった。

「ほう、家庭教師か。」

意外そうな表情で牛尾が訊ねた。

「そう。」

「お前のことだから、どうせ相手はメツチェンだろう。」

「ばか、女の子だけど、小学生だよ。」

「小学生？ うまい口をみつけやがった。」

「だから、今日は……。」

牛尾の口調によりやくほつとして、明史は別れの手をあげた。牛尾は返事のかわりに強く張つた顎の先を小刻みにしゃくつて頷いた。

確かにうまい口には違いない。生徒は私立小学校の四年生で、算数と国語を教えるのに特別の準備はいらなかった。どうも勉強が嫌いなのでなんとか興味をもてる程度に指導してほしい、との依頼だったが、明史としては一緒に遊んでみるほどのことしか考えていない、きわめて無責任な家庭教師だった。それでいて、謝礼は中学生や高校生を教えるのと変らないのだから、牛尾の言葉は当たっている。いや、おそらくは彼が羨んだ以上の……。

これは経済活動なのだ。俺の下部構造に関わる問題なのだ。したがって、他のどのような活動にもまして優先させることをいささかも恥じる必要はない——。大学のすぐ前にある駅への短い坂を大股にくだりながら、殊更めて明史は自分に言いきかせた。そうしながらも、その考えをほとんど信じていない事実を彼は身体の内奥で感じ取っていた。なぜなら、彼の東京での暮らしは長野に転任になった父親からの仕送りで支えられているのであり、必ずしも豊かとはいえないにしても、それは決してアルバイトで補わねばならぬような金額ではなかった。したがって、地方出身の寮生達の中に時折見かける、奨学金と家庭教師の収入で自分の生活費をまかなっている連中のアルバイトとは本質的に異なるものであることを、彼自身が一番よく知っていた。

更にまた、家庭教師に唐津を訪れること自体がひそかな愉しみに育ち始めているのにも、彼は気づかねばならなかった。つまり、明史のアルバイトは経済活動などではなく、東京での親許を離れた彼の暮しに添えられた、一枚の美しい絵に似た何かだったのだ。

もしも差し迫った政治的要請と——ささやかな街頭デモも本当はその一つである、と彼は深刻

めかして考えた——アルバイトなどという仮面を剥ぎ取られた美しい絵との二者択一を強いられた場合、俺はどちらを選ぶべきなのだろう、と渋谷行の電車に乗りこんだ彼は自問した。

結論ははっきりしていた。たとえ一枚の絵がどれほど美しくとも、牛尾がよく言うように再軍備を目指した徴兵制度でもひとたび実施されれば、権力によってそれこそ額縁ごとキャンパスは奪い取られてしまうに違いない。だから現実を直視し、目先の出来事にのみ心を注ぐのではなく……。

しかし、あまりにすぐ答えの出してしまうその先に、本当はもっと厄介でもう少し入り組んだ問いかけがひそんでいるような気がする。奥行き深い次の問いを追究すること自体がまた一つ大きな問題なのだが、電車は既に神泉駅のトンネルを過ぎ、高架になった渋谷駅のプラットフォームに滑り込んでいる。

山手線に乗り替えて品川までドアの脇に立つ間に、次第に問いの形はぼやけて来る。そしてそこからまた京浜東北線で大森まで揺られるうちには、もう街頭デモのことも、徴兵制度の危険も明史の頭から消え去っていた。ピースの箱があるのをシャツの胸のポケットに確かめ、汗を拭いたハンカチが汚れてはいはしないかとそっと畳みなおした後は、いつも電車の中でそうするように鞆から文庫本を取り出して読もうともせず、ただ窓外の景色を落着かぬ眼で眺め続けるだけだった。

電車が大森駅に着くと、明史はその土地の住人を真似た、物馴れた足取りで階段を駆け昇り、山側の改札口を出て線路に沿ったバス通りのゆるい坂を北に辿った。

東京で育ったといってもほとんど中央線の沿線にしか住んだことのない明史にとって、貝塚が

発見されたような海に近い土地は新鮮だった。父親の転任で両親が東京を離れる時、大学に通っていた明史は父の古くからの友人で子供のいない笹本家に部屋を借りることになった。その家もやはり中央線の中野にあったのだから、彼がおばさんと呼んでいた笹本夫人に頼まれて、彼女の歳下の友達である麻子の一人娘の家庭教師にでもならなければ、大森は彼にとって一生無縁の土地に終わったかもしれない。

家庭教師の話を持ち出す際、明史ちゃんのような東大生に勉強を見てもらえばとても嬉しいって麻子さんはいうけれど、相手が小学生だし、なにしろうちが大森で遠いからねえ、と笹本のおばさんは遠慮がちに彼の意向を打診した。

大学の帰りに渋谷から廻ればさほどのこともなさそうだし、家庭教師の収入にも魅力を感じた彼は、二つ返事でその申出を引き受けた。

「きつと大喜びだよ、あの人は。」

おばさんはいそいそと立って電話をかけ、話のまとまったことを告げると唐津家への地図を詳細に描いてくれた。

「お金はあるうちだから大丈夫。小学生に教えるのは高校生に教えるのよりもっと難しいのよって言ったら、お礼は充分にしますって言ってたわ。」

「そんなお金持ちなんですか。」

「御主人が自分で会社をやっている社長さんですもの。でも万里子ちゃんというその小学生が一人娘でね、麻子さん、ちょっと寂しいんじゃないかなあ。」

「子供が一人だから？」

「それもあるかな……。」

おばさんは曖昧に言葉を濁して話題をそらせた。

「素敵なおうちよ、駅から少し歩くけど。」

「お屋敷なんですか。」

明史はやや氣遅れがした。

「まあ、行つてごらんさい、わかるから。」

そんなふうには教えられた唐津麻子の家が近づいていた。東京湾が近いといつてもそれは京浜東北線の線路から海側に出た場合の話であり、反対の山側を歩いている限り、小さな起伏は見られるものの、どこにも海の氣配など感じられない住宅地の佇いが続いている。まして山側の奥へ奥へと斜めにはいつて行く唐津家のあたりは閑静な家並みであり、その近辺も空襲で焼けたのかもしれないが、火を免かれたと思われる大谷石のどっしりとした塀の延びる大きな家や、古びた日本家屋などが連なっていた。

最後の角を曲ると急に樹木が多くなり、道にひんやりとした空氣が漂うと同時に蟬の聲が降つて来た。道沿いに繋る木々の一段とこもり深く見えるのが麻子の家だった。

ペンキ塗りの白い木の柵を塀にしたその家は、一軒だけ近所のどの家屋とも異なる不思議な霧囀氣に包まれている。とりわけ大きな木があるわけではなかったが、柵の中の土地いっぱいに木立ちと呼びたいほど密に闊葉樹が林立し、その重なり合つた枝葉の下にひっそり隠れるようにして小ぢんまりした洋風の住いが蹲^{すま}っていた。それは豊かな庭木をもつ家ではなく、林の中にかきその場所を求めて身をひそめた建物とでもいった風情だった。高原の別荘に似ていなくもなか

つたが、日々の暮しから切り離された軽やかさは見られず、かといって地に腰を据えた落着きも感じられず、どことなく儚げな匂いに覆われている家だった。初めて唐津家の前に立った時、すぐには白塗りの柵に続く低い木の門扉を押すのも躊躇われ、明史はしばしその光景に見とれたものだった。

幾度か通ううちに、最初の違和感は独得の魅力へと明史の中で変わって行った。木立ちや建物に惹かれるのではなく、住んでいる母と娘にただ興味を覚えるのでもなく、週に一度唐津家で過すひとときが彼にとって貴重な時間であることを発見したのだ。これも白く塗られた横張りの木のドアを背後に閉じて家の中にはいると、もう大学の喧噪も、笹本の家で彼が寝起きしている玄關脇の四畳半の陰気な空気も、遠く長野に離れた親達の気配も、なにひとつはいりこむことの出来ぬ明るい穴のような世界が開けていた。明朗な性格だが堅実一方の家庭婦人である笹本のおばさんが、こんな風変りな家の住人と交際のあること自体、なにかそぐわぬように思われてならなかった。

後のためにハンカチは使わずにおこう、と考えた明史は手の甲で額の汗を拭い、油蟬の声が狂おしく降り注ぐ下に微睡む家に向けて白い門扉を押した。外から窺う限り、そこは人が住んでいるのかいないのか、見わけのつかぬほど静まり返った二階屋だった。まして今は、油の煮えたぎる蟬の絶叫に押し潰されたかの如く沈黙に沈んでいる。

それでもドアの横の呼鈴を押すとたちまち小さな足音が起り、なにかを叫ぶ万里子の声が耳に届いた。

「騒いでいないで早くお開けなさいよ。暑いのに先生がはいれないじゃないの。」

麻子の言葉と同時にドアが開かれた。ヒマワリ色の袖なしのワンピースから浅黒い腕を出した小柄な彼女の後ろに、半ば隠れるようにして娘がまといついている。もう訪問する回数も重なっているのに、いつも玄関で同じ場面が繰り返された。

「ひどいでしょう、今日は。もうぐだぐだしてしまつてね、二階で万里子と伸びていましたの。」板張りの床の居間に明史を通し、褐色の玉を連ねて垂らした簾の向うにはいった麻子は勢いのいい水音を迸らせた。

そうですね、と答えはしても、万里子が冷たい水に固く絞られたタオルを持って来てくれるまで、彼はほとんど暑さを苦にしていなかった。ところがひんやりとしたタオルで顔を覆った瞬間、激しい熱気に身を包まれていたことに気がついた。拭けば拭くほど、顔だけではなく首筋から腕にまでかけて汗が噴き出して来る。まだ台所でヒマワリの色を揺らしている麻子の視線を気にしながら、素早く開襟シャツの奥の腋の下を拭いた。白いタオルが薄黒く汚れたのが眼にとまると、彼は慌ててそれを裏側にして畳みなおした。

「まあ、夏休みが終ったらねえ、もう早速算数のテストが先週あつたんですよ。ねえ、万里ちゃん。」

微かな水の音をたてる飲み物を運んで来た麻子が笑って娘を振り返った。万里子は母親を無視してわざとらしく壁のどこかを見つめている。

「どうでした、それで。」

コップをテーブルに置いた麻子は、薄い上口唇をくわえこむようにして、急に表情の濃くなった顔を無言のまま横に振ってみせた。困っているというより、どこか事態を面白がっているとも

取れる奇妙な表情だった。針の先で一点を突けば、たちまち濡れた笑いが顔中に拡がりそうな気配もある。

「弱ったな。教え方がまずいかな。」

戸惑いを抑えつつ明史も首を傾げた。

「わかつていたもの。」

外の蟬の鳴声を弾き返す口調で万里子が言った。

「わかつていたのに出来なかった？」

「時間がなかったもの。」

「それなら、もう少し早くなればいいわけだ。」

明史は胸のポケットからビースの箱を出して煙草に火をつけた。漂う煙を擲もうとして、伸び上った万里子が掌を閉じたり開いたりした。

「先生、灰皿。」

後ろの棚からガラスの小さな灰皿を渡してくれる麻子は、いつもの母親の顔に戻っていた。

その日、帰りの蒸し暑い電車の中で、麻子の口唇をくわえこむようにして横に振った顔が幾度も思い出された。隠された微笑とも、揶揄ともそれそうな謎めいた表情が明史は気にかかってならなかった。家庭教師を頼んでいる母親が、娘のテストの不成績を喜ぶ筈はない。としたら、あれはやはり指導の成果をあげられぬ家庭教師に向けられた諦めまじりの冷笑だったのだろうか。

——無理だよそれは、と夕刻のこんだ電車の中で明史は思わず小さな抗議の声をあげた。夏休みの始まる少し前から通い出してまだ回数も足らず、万里子の気持ちもうまく擲めていない新米

の教師に、そう簡単に成績を引き上げるのは難しい。横に立っていた勤め帰りらしい若い女が、身体をよじるようにしてこちらを窺うのがわかった。窓から吹き入る風を飲み込む仕種で彼はせわしなく口を動かし、洩れてしまった声をごまかそうとした。しかし女が窓の外に眼を戻すと、彼はまた麻子の顔に向き合っている。家庭教師の能力へのからかい半分の冷笑にしては、あの表情はどこか深過ぎた。彼女の見つめていたのは娘でも明史でもなく、もしかしたら彼女自身ではなかったか……。そう考えるとなにか納得出来そうだった。同時に、そんな麻子をこれまで一度も見たことがなかったのにも気づかされた。金色の縁飾りのついた楕円形の大きな鏡の中に、ヒマワリ色のワンピースを着た俯きがちの小柄な女性の姿を置いてみたかった。と突然、その女は物憂げに首を横に振り始めた。イヤイヤをしているみたいだった。そのくせ、どちらでもいいイヤイヤのような投げ遣りの匂いも放たれている……。

車内の乗客が周囲で大きく動き、ドアがしまつて電車が再び走り出した時、いま停ったのが山手線に乗り替えるつもり品川駅であったのに明史は驚いた。身体の上にとっけと捧げ持っている黄金色の液体を入れたコップを、慌てて身動きすることで揺らしたくなかった。もうしばらく、コップの中をじっと見つめていたかった。遠廻りにはなるけれど、このまま東京駅まで行つて中央線に乗り替えればいい、と思った。なぜか、どこにも帰りたくない気分だった。

玄関の格子戸を開けると、暑かったたでしょう、と笹本のおばさんが明るい声を明史に浴せた。曖昧に答えて部屋にはいろうとする彼の背を、お母様からお便りが来ているわよ、と同じ声が追いかけて来た。

窓の前に据えた座机に一枚の葉書がのせられている。差出人の住所も名前もなく、ただ「母よ

り」ただけ記されたいつもの音信だった。

お休みが終つてあなたが帰つてしまつたら、急に寂しくなりました。また元氣に東京の暮らしを始めたことと思います。こちらはお役所の関係のおつき合いはいろいろとあるのですが、東京のように親しい方がいないのでつまりません。兄貴サンはお勤めだし遠いからなかなか帰れないので、あなたのお休みだけが楽しみです。秋休みは駒場祭だとかいつていたけれど、戻れそうにありませんか。

笹本さんにお世話になつてゐるのだから、と安心してはいますが、どうかくれぐれも自重して、健全な学生生活を送つて下さい。由美ちゃんがお兄さんに手紙を書きたいといふので、こちらの住所を教えておきました。おばさんに宜敷お伝え下さい。

読みにくい細かな字でぎつしり書かれた葉書に眼を通すと、明史はそれを机の上に投げた。「どうかくれぐれも自重して」という言葉に滲む母の湿つた声が鬱陶しかった。女子高に通つてゐる隣家の由美子が手紙をくれるという一行だけが仄かに浮き上つて見えた。唐津家専用の役目を終えたピースの箱を胸のポケットから出して煙草に火をつけ、明史は四畳半のまんなか大の字に身体を投げ出した。来週の水曜日が今から待ち遠しかった。

2

その晩の《夜光虫》の集りは、これまでとは少し違つてゐた。会合の場所は最近引越した跡村

の家だったが、なにしろそこには彼自身のアトリエがあったのだから――。

アトリエとはいっても南に面して開いた六畳ほどの板の間で、天井が高いわけでもなければ特に採光の注意が払われているのでもなく、離れに似たやや独立した一室が長男の彼にあてがわれただけのことだった。しかしそこに描きかけの作品の置かれたイーゼルが立てられ、あちこちの壁にキャンバスがもたれかかり、布を敷いた小さなテーブルの上に果物が転がり、テレビン油の瓶や絵筆などが絵具にまみれたパレットのまわりに散乱しているのを見ると、跡村がもういっぱしの絵描きにでもなったかのように明史は圧倒された。

高校時代に親しい友人達と作った同人雑誌〈夜光虫〉のグループで途中からもっぱら表紙絵を担当するようになっていた跡村は、美術部の活動を続けてそのまま美術系の大学に進んだ。他のメンバーのほとんどが大学の文科系の学部にはいり、まだ将来何をするという当てもなく漠然と語学や社会科学の講義を受けている間に、跡村だけは早くもひとり自分の未来を見据えているような雰囲気とそのアトリエには濃厚に漂っていた。

恰好ばかりつけやがってとか、それで少しはましな絵を描いているのか、などと憎まれ口を叩きながらも、アトリエにはいつて来る仲間達は一様に羨望の眼で室内を見廻した。

俺の四畳半にも座机があり、抽出しには原稿用紙も万年筆もはいつているのだから、作品を生み出す上ではなんの見劣りもない筈だと思うのに、なぜか明史は焦りを覚えた。

しかし従来は編集会議や同人の集りを、各自の家の狭い勉強部屋などで持ち廻りに開いていた仲間達に、今後は〈夜光虫〉の会はこのアトリエを使うようにしてくれ、との跡村の申出は諸手をあげて歓迎された。小さな椅子、木の腰掛け、床に置かれたクッションと銘々が好みの位置を